

【祈禱会奨励】「主の約束と警告」 士師記1:1～2:5、ウ信仰告白7:1,3 (1/19)

私たちはヨシュア記を読んできたわけであり、その流れで士師記において何が語られているのかを、共に考えていくことが求められています。つまり、サムソンやギデオンといった勇敢な獅子の物語として矮小化してはなりません。

ヨシュア記では、アイにおける罪がありました。全体としては主なる神がヨシュアをとおして語られたことを、イスラエルの民は聞き従い、アブラハム、モーセに約束されていた約束の地カナンにイスラエルの民が入ることがゆるされることが語られていました。

一方士師記は、勇敢な12名の士師が出て来た時代と読むことができますが、士師がいないう状態のイスラエルは、腐敗に満ち、罪を繰り返したことが語られていきます。

つまりヨシュア記がコインの表、士師記がコインの裏側の関係にあります。ヨシュアが死を迎え、イスラエルに指導者がいなくなった時、イスラエルの人々は主の御声に聞き従わず、主から離れていきました。この時、主から二つのことが示されます。一つは、主に逆らうが故の主による裁きです。主の恵みの内に救いに入れているイスラエルでも、主から離れることにより、主の裁きを逃れることができません。そしてもう一つが、恵みの契約です。本来ならば、罪の故に裁きを受け、滅びに至るイスラエルであっても、なおも主が共にいてくださり、士師が立てられ、主の恵みが示されていきます。

ヨシュア記では各部族に嗣業の土地が割り当てられていきました。しかし、まだイスラエルが征服していない多くの土地が残されていました。そして、ユダを皮切りに各部族が、カナンの諸部族を滅ぼし土地を占領しようとします。そして彼らが約束の地を獲得した時、イスラエルの各部族は、主によって与えられた土地を、完全には自分たちのものとすることができず、原住民であるカナン人たちが居続けたことがここで語られています(1:19-36)。

この時に主なる神は、主の御使いをつかわし、二つのことを語ります(2:1-3)。第一は「わたしはあなたたちと交わしたわたしの契約を、決して破棄しない」こと。これは創世記17:7において主なる神がアブラハムに対して約束されたことです。「わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる」。どんなことがあっても、主はイスラエルの民、特にダビデの子として与えられるキリストが約束されているユダの家を守ってくださいます。

そしてもう一つ、「あなたたちもこの地の住民と契約を結んではならない、住民の祭壇は取り壊さなければならない、と」。出エジプト23:32-33、申命記7:1-2,5等において、主が繰り返し語られてきたことです。戦争をして、滅ぼし尽くすのは、主なる神が直接命令されているからです。彼らは、決して悔い改めることがなく、罪による滅びに定められているからです。新約に生きる私たちに、主なる神は同じことを命令されておらず、主に逆らう者に対して、悔い改めを求めていかなければなりません。

救いの契約を破棄しないことと、罪による裁きの警告、相反することが語られているように思われる方もいるかと思えます。しかしこれらのことは、ウェストミンスター信仰告白第7章「人間との神の契約について」で、理解して頂けるのではないかと思います。

本来人間は、罪の中に生きており、主の裁き、滅びを免れることができない存在で、すべての人間は、罪の故に裁きを受け、滅びに向かって歩んでいました(ウ信仰告白7:1)。

しかし主なる神が、一方的に私たちを捕らえ、神の子として召してくださり、救いの中に入れられました。この時に結んでくださったのが恵みの契約です(ウ信仰告白7:3)。

旧約における恵みの契約は、イスラエル、そしてユダの家から、ダビデの子として、救い主イエス・キリストが与えられるために、主の約束が成し遂げられました。そして、旧約・新約、つまり時代を超えて共通していることは、神の愛の故に神の子として召される者に対して、主は罪人であるにも関わらず、御子の十字架の御業の故に罪を赦し、神の子としての永遠の生命を約束してくださり、この恵みの契約が破棄されることはありません。

そのため神の恵みから離れることなく、罪の誘惑に陥ってはならないことを、主は愛の言葉として警告してくださいます。罪の故に滅び行く私たちに、主の恵みにより罪の赦しと永遠の生命が約束されており、この約束は破棄されることはありません。主の恵みに感謝して、信仰生活を歩んでいただきたいと思います。

**【祈禱会奨励】「主への背信と主の憐れみ」士師記2:6~3:6、ウ信仰告白6:2,4 (1/26)**

ヨシュアの死後、イスラエルが約束の地に入るにあたり、原住民を滅ぼし尽くすことができず、追い出すことができません。それにも関わらず、主なる神は「わたしはあなたたちと交わしたわたしの契約を、決して破棄しない」(2:1)と宣言してくださいました。

今日の御言葉では、ヨシュアが地上の生涯を終えた後、指導者を失ったイスラエルがどのようなになるかが要約して語られています。指導者としてのヨシュアがいなくなると、主の恵みを忘れ、主の目に悪となることを行い、バアルに仕える者たちが現れ、主が怒りを発せられます(10b~12)。こうしたことは士師の時代に限らず、イスラエルの歴史そのもの、そして新約の教会の歴史そのものです。教会には、人々をリードし、まとめ上げる指導者が立てられている時、教会の歩む方向性は定まり成長を遂げます。しかし、指導者を失った時、教会では腐敗が生じ、墮落の道を歩みます。救いをお与えくださった主の恵みを忘れ、信仰、つまり神学の上でも一致することができなくなり、結果として信仰が歪み、偶像が教会の中に入ってきます。そうした時に、罪による教会の腐敗が生じます。

人間は、元来全的に墮落しているからです(参照：ウェストミンスター信仰告白6:2,4)。つまり、私たち人間は、アダムとエバが罪を犯して以来、すべての人が全的に墮落しています。そのため、教会にリーダーシップのある指導者が現れた時は、そちらに引っ張られていくのですが、そういう人がいなくなると、自分の持っている罪が全面に出て来て、罪を犯し、主に逆らった行動をとるようになるのです。

教会が腐敗した結果、主の裁きをもたらされます(13~15)。腐敗の結果の裁きは、ソロモンの時代にイスラエルが南北に分裂したこと、そしてその後、北イスラエル王国はアッシリアに、南ユダ王国はバビロンに滅ぼされて、捕囚の民とされたことが挙げられます。

士師記では「主に助けを求めて叫んだ」と言う言葉が繰り返されていきます(3:9, 15, 4:3, 6:6, 10:10)。自らの弱さ、罪が示され、自分の力では何も解決することができないことを知るにより、主なる神に委ねて祈ることが求められます。

私たちも同じです。苦しい時、自分でなんと解決しようとしてあがいてしまいます。しかしこうした時にこそ、自分の力で解決しようとするのではなく、すべてを支配し知っておられる主なる神に委ね、主の御言葉に聞き、主に祈り求めることが、私たちに求められています。私たちの祈りを、主なる神は、様々な形で問題を解決へと導いてくださいます。士師記においては、主の憐れみにより士師が立てられ、イスラエルの民が救われます。

さて、士師記には12名の士師が出て来ます。ギデオン、サムソンに代表される詳細が語られる士師もいれば、名前だけで、何を行ったかほとんど分からない士師もいます。士師が12名であることが大切です。イスラエルの12部族、主イエスの12使徒で代表されるように、12は完全数であり、主なる神の御業の現れです。

「士師」とは「さばきづかさ」とも訳されてきており、イスラエルの政治的・宗教的指導者のことです。「支配者、権威を行使する者」の意味で理解できます。しかし、士師は、イスラエルの人々の叫びを聞いた主によって立てられ、彼らの支配・権威は、主なる神によってもたらされていることを忘れてはなりません。真にイスラエルを裁かれる方は主なる神のみであり、士師はその代理として立てられているのです。事実、士師たちは主の霊によって立てられたことが繰り返し語られます(3:10, 6:34, 11:29, 14:6, 19, 15:14)。つまり士師の役割は、主の憐れみの器としてイスラエルを破滅から救い出すことです。

新約の時代も、主なる神は偉大な神学者をお与えくださいます。古代ではアウグスティヌス、そして宗教改革者ルター、カルヴァン……。そして今の時代も、教会に牧師・長老をお立てくださいます。偉大な神学者も牧師・長老も、神の権威・支配を御言葉を通して指し示す働き人であって、決して自らが神の座に就いてはなりません。またそうした危険性を取り除かなければなりません。ですから偉大な神学者であっても、素晴らしい牧師や長老であっても、カトリック教会の福者や聖人のように、崇拝の対象としてはいけません。

主はイスラエルの民の中に、カナン人を残されました。イスラエルを試みるためです(3:4)。私たちも様々な罪誘惑の中に生きていますが、常に主の御前に立ち、自力で生きるのではなく、主にすべてを委ねて祈り求めて生きることが求められています。

**【祈禱会奨励】「こんな人でも主は用いられる」士師記3:7~31、ウ信仰告白5:4 (2/2)**

士師記の学びを行っています。主によって約束の地カナンが与えられたイスラエルですが、ヨシュアが地上の生涯を終えた後、イスラエルの民は罪を犯すことが、主によって示されていました。そしてこの時に立てられるのが士師です。

12人の士師の時代、パターン化されていることが2章において語られていました。「背信 — さばき — 叫び — 神による救い」の循環です。士師として三番目のシャムガルは、牛追いの棒でペリシテ人600人を打ち殺したことが記されています。

最初のオトニエルに関しては、士師の時代を象徴する書き方となっています(7~12)。

1. 背信 — 7 イスラエルの人々は主の目に悪とされることを行い、彼らの神、主を忘れ、バアルとアシェラに仕えた。
2. 裁き — 8 主はイスラエルに対して怒りに燃え、……。
3. 叫び — 9 イスラエルの人々が主に助けを求めて叫んだので、
4. 神による救い — 主はイスラエルの人々のために一人の救助者を立て、彼らを救われた。これがカレブの弟ケナズの子オトニエルである。

士師に関して、主の霊が彼の上に臨んでいること、主が戦い勝利を遂げてくださったことが記されており、私たちは士師を英雄視してはなりません。

主なる神は、士師としてベミヤミン族のゲラの子、左利きのエフドを召し出します。ベニヤミン族とは、「幸いの子」と語られていますが(創世記35:18)、「右手の子」を意味する、後継者という名誉ある名です。しかしエフドは、「左利き」と記されていますが、右手が不自由で用いることができない体であったと解釈する人もいます。つまり、ベニヤミン族から主なる神が選ばれたにしては、相応しいとは言えないのではないのでしょうか。

さらにエフドが、イスラエルを苦しめているモアブの王エグロンの下に遣わされることになりませんが、主らの召しに従って行動したのかと、疑問に感じてしまう行動を行います(16~23)。つまり主を信じて、主の召しに従って行動したというよりも、罪に満ちた人間のドロドロとした世界が語られているように思います。

しかしこのエフドの行動により、イスラエルは1万人のモアブ人を打ち殺し、それ以後80年間、イスラエルは平和であったと語られます(30)。

主なる神により召し出され、救いへと招かれた私たちキリスト者は、私たちを救うために、主は善によって救いの御業を成し遂げられると思っています。しかし、このエフドに関して、右手に障害を持ち、勇士としては欠けのある人間が、主によって召されました。

しかし主なる神は、時として、罪をも用いて、主の御業を成し遂げられます(参照:ウエストミンスター信仰告白5:4)。もちろん、神が罪を作られたわけではありません。しかし神は罪を許容されると同時に、「罪を、御自身の清い目的に役立つように、種々の方法で、最も賢く、力強く制限し、さもなければ、秩序づけ、統治することによる」と告白します。このことは、私たちにとって簡単に納得し理解できることではありません。

このことが一番よく表れているのが、主イエスが十字架に架けられる場面です。主イエスが十字架に架けられ、私たちに代わって肉の死を遂げ・墓に葬られ・陰府に下られることにより、私たちが担うべき罪の刑罰がキリストにより支払われ、私たちの罪が贖われ、キリストの復活により、私たちも神の子とされ、永遠の生命が約束されました。しかし、キリストを逮捕し十字架に架けたのは、ユダヤ人たちであり、ヘロデ王、ポンティオ・ピラトでした。彼らの行動がなければ、キリストが十字架に架かることはなく、そうなれば、私たちがキリストの御業の故に罪が赦されることもありませんでした。主なる神は、ユダヤ人たちの罪を用いて、私たちの救いの御業を完成してくださったのです。

主なる神は欠けのあるエフドであっても士師として召し出し、その働きをまっとうさせてくださいました。そして今教会に集められている私たち一人ひとりもまた、罪があり、欠けの多い者ですが、主は神の子としてくださり、キリストの教会を立て上げるために召し出してくださいました。主がお与えくださる働きは、身体・個性・能力に応じて違います。しかし、今教会に集う一人ひとりの働きにより、キリストの体である教会が立てられていきます。主はあなたをも主の働き人として召してくださっています。

士師記の学びを続けています。イスラエルの民は、士師がいなくなると罪を犯し、そして主による苦しみに置かれますが、苦しんでいる時に主なる神を思い出し、主に対して助けを求めると、主なる神はイスラエルを助けるために士師を立ててくださいます。

4章では、女預言者デボラが士師として立てられます(3)。この4章では、デボラと共に、ヘベルの妻ヤイルの働きが語られています。

現在においては、性的な違いによる差別が厳しく語られるようになりましたが、旧約の時代も、主イエスの時代も、男性社会であり、男尊女卑の世界であることを否定することができません。差別が生じるのは、アダムとエバの最初の罪以来、罪に汚れている結果であり、新約の教会はこの固定的な差別を、福音において解消することが求められています。

改革派教会において、女性の教師(牧師)・長老が認められたのは、2014年、つい最近のことです。大会では、聖書において女性が語ること・治めることが許されているのか、否かを、約20年かけ慎重に議論してきました。差別の解消を議論していたのではありません。

士師としてはデボラが唯一ですが、女性の預言者について、聖書は他にも語っています。

①モーセの姉ミリアム(出エジ15:20)。②ヨシヤ王に神の意志を宣告したフルダ(列王下22:14)。③ネヘミヤを脅迫したノアドヤ(ネヘミヤ6:14, 偽預言者)。④イザヤの妻(イザヤ8:3)。⑤メシヤを預言した老アンナ(ルカ2:36-38)。⑥フィリポの娘たち(使徒21:9)(参照:使徒2:17, Iコリ12:10・28-30)。

主なる神は、性の違いに関係なく、一人ひとりを見て召しを与え、主の働き人として召し出してください。そしてその人は、聖霊により強められ、必要な賜物が与えられ、奉仕を行うことができるものとされていきます(参照:ウエストミンスター大教理問75)。

また私たちは旧約と新約の一貫性を覚えなければなりません。旧約と新約の時代では、必然的に主がお与えになる賜物は異なり、その働きも違います。新約においては預言者・祭司はおらず、教会役員として牧師・長老・執事です。旧約における預言者・王・祭司の働きは、新約における牧師・長老・執事に受け継がれており、それぞれの働き人として召し出されることに、違いはありません。

この当時イスラエルの民を苦しめていたのは、2節より、カナン王ヤビン、そして將軍シセラです(2)。

そして主なる神は、デボラをとおしてバラクに対して將軍シセラとその軍勢がバラクの手へ渡されたことを宣言されます(6-7)。このときバラクは、デボラに対して、「あなたが共に来てくださるなら、行きます。……」と答えます。バラクは攻撃をすることが求められているヤビンと將軍シセラの軍勢が強いことを認め、心がひるんでいるのではないのでしょうか。さらに彼は、この命令を発している主なる神ではなく、目の前にいる女士師デボラを見ています。「この命令を発するあなたにも責任があるのであり、逃げないで頂きたい」とでも言っているように私には聞こえます。

この言葉を聞き、デボラは「わたしも一緒に行きます」と語ります(9)。主によって召され、士師としての働きを担ったデボラは、主を信じ、すべてを主に委ねて従います(14)。この結果、デボラは勝利を遂げ、カナンのシセラの軍勢は全滅します(16)。

しかし將軍シセラは逃げます(17)。しかしこの時も、主はすべてをご存じであり、次に主の働き人として召し出すのが、カイン人ヘベルの妻ヤエルです。彼女は異邦人の女性ですが、主なる神はシセラを裁くために、彼女を主の働き人として召し出されます。

デボラは「主は女の手でシセラを売り渡されるからです」(9)と語っていました。この言葉は、ヤイルによって実現します(17-24)。

主なる神は、主の御業を成し遂げるために、主が必要とする人を召し出し、その働きのための信仰と賜物(能力)をお与えくださいます。そしてそれは、性別は関係ありません。こうしたことは、身分・民族・心身の障害の有無の違いも関係ありません。主は主が求められる人を神の民として召し、また主の働き人として召してください。主から働き人として召されるとき、私たちは、デボラのようにバラクを疑うのではなく、主からの命令として受け入れ、主の御言葉に聞き従い、主にすべてを委ねて、その働きをまっとうすることが求められています。

今回は、女性である士師デボラ、そして異邦人の女性として主に用いられたヤエルが主によって召しを受け、主の働き人として遣わされたことを、共に学んできました。そして、今日の御言葉では、士師デボラの歌が記されています。正直なところ、理解するのが難しい所もあります。しかし、段落毎に区切って、ゆっくりと繰り返し読むことにより、主なる神の御業、そしてデボラの信仰が見えてくるかと思えます。

最初の段落は2~5節です。イスラエルにおいて民が髪を伸ばすとは、ナジル人の誓い（参照：民数6:2~5）です。主なる神を信じ、特別な誓いを行い、ナジル人となることで、主から特別な力が与えられました。士師であればサムソンがナジル人の誓いを行います。

この時、主なる神の栄光が示され、主なる神がイスラエルに行ってくださいました御業を顧みることができます。セイル(4)とはシナイのことであり、出エジプトにおいて、十戒が授けられ、荒野の40年を経て、主なる神は約束の地シナイにイスラエルを導いてくださり、そして勝利を遂げてくださったことを顧みます。

イスラエルの民は、年に一度、過越を覚えることにより、出エジプトにおける主の御業を顧みることが求められました。私たちが聖餐式において、キリストの十字架の御業を繰り返し覚え、救いの感謝を行います。私たちは、生きて働く主なる神を繰り返し覚えなければ、信仰が思弁的になり、信仰が希薄になってしまいます。

続けてデボラの働きが語られて行きます(6~13)。「アナトの子シャムガル」は3:31に出てくる士師のことです。「ヤエル」は4章で出て来たカイン人ヘベルの妻ヤエルです。カナン人の王ヤビンや将軍シセラの名を挙げることなく、ヤエルを挙げるのは、世的な支配ではなく、主なる神の支配において、誰が遣わされていた時代であるかを語っています。

この時代、イスラエルの人たちはまた罪を犯し、「村々は絶えた。イスラエルにはこれらは絶えた」(7)と語られます。この時に、主によってデボラが立てられますが、このように歌います。「わたしデボラはついに立ち上がった。イスラエルの母なるわたしは ついに立ち上がった」。デボラの主観的な働きのように記しますが、主なる神がデボラを立てたことを、私たちは忘れてはなりません。

そして、10~11節などは、4章では語られていなかった状況が歌に歌われています。

第三段落(14~18)では、イスラエルの諸部族について語られて行きます。デボラの呼びかけに応じてバラクと共に戦った人たちは、呼びかけに応えた人たちでした。特にゼブルン・ナフタリ両部族からは1万人が出ており、賞賛されています。エフライム、ベミヤミン、マルキ(マナセのこと)、ゼブルン、イサカル、ルベンと挙げられていき、賞賛されています。しかし、ギレアド、ダン、アシェルは、兵を出さなかったことがここで語られています。

次にイスラエルに勝利がもたらされ、カナンが敗北していく状況が歌われます(19~23)。

そして本論の最後の部分では、カイン人ヘベルの妻ヤエルが祝福を受けています(24~30)。女たちの中で最も祝福されるのはヤエルであり、主の召しに従い、主の命令に従って行動する者に対する主の祝福が語られて行きます。

一方、歌の最後を締めくくるのは、主からの士師により、悔い改めが示されていたにもかかわらず、聞く耳を持たず、滅ぼされていったカナンの人たちの代表として、将軍シセラの母のことが歌われています。ここで語られていることがいかに自己中心であるかということが、露わにされています。

デボラにしても、ヤエルにしても、そしてイスラエルの諸部族にしても、主なる神の御前に生きています。主の御声に聞き従っています。この時、主は恵みと祝福をお与えくださいます。デボラの歌は、個人を称賛しているように感じる所もあるかと思いますが、歌において中心的に語られていることは、主なる神が御支配になり、主の御業が成し遂げられる中であって、主の御声に聞き、聞き従う者に与えられる恵みと祝福がある一方、主の御声を聞こうとしない者は、自己中心に生き、結果として、主による裁きもたらされ、滅びを避けることができないことがはっきりと示されています。今年の標語ですが、主の支配に生きることは、謙遜と自己否定により、主の御声に聞き従っていくことです。このことが、このデボラの歌においても、はっきりと歌われているのではないのでしょうか。

士師記の学びを続けています。士師記にはパターンがあることをお語りしました。イスラエルの墮落—主への助けの叫び—士師が与えられる—勝利し祝福に満たされる。今日の御言葉においても、6:1~6において、そのことが繰り返されることが語られています。

そしてこの時に与えられた士師がギデオンです。12名の士師の内でも、サムソンと共に名の知れた士師です。6~8章、そしてその子たちのことが9章で語られていきます。6章ではギデオンが主から召しを受け、士師としての働きを始めることが記されています。

小さいときから教会に通っている方々はそれが当然とっていますが、未信者の方が教会に最初に来る時、しばらく教会から離れており久しぶりに教会に行く時、また初めての教会に行こうとする時、心が揺さぶられ「本当に行って良いのだろうか?」、「受け入れられるのだろうか?」、「断られるのではないだろうか?」と考えることかと思えます。

聖書で語られている族長・士師・預言者・主イエスの弟子たちは、立派だから、そんなことはないだろうと思っている方もいるかと思えます。しかし、アブラハムやモーセ、ペトロやパウロであったとしても、主の御前に一人の罪人であり、主からの召しと与えられた時には、心に格闘があったことを聖書は語ります(例:モーセ・出エジプト3:11~14)。

ギデオンも主なる神と問答することから始まります(6:12~24)。

クリスチャンになる、主の働き人として召されることは、聖書に出てくる人たちも私たちも同じです。一人ひとり、その方法は異なりますが、聖書に出てくる人たちが立派に主の働き人として召された人たちであっても、私たちであっても、主によって召され、クリスチャンになること、またそれぞれの働き人として召されることに違いはありません。ウェストminster大教理問答は次のように告白します(松谷好明:訳)。

問66 選びの民がキリストともつ結合とは、どのようなものですか。

答 選びの民がキリストともつ結合とは、それによって選びの民が、霊的かつ神秘的に、しかし現実的で不可分に、かれらの頭であり、夫であるキリストに結ばれる、そのような神の恵みの御業です。それは、かれらに対する有効召命においてなされます。

問67 有効召命とは何ですか。

答 有効召命とは、それによって神が、かれの選びの民への自由で特別な愛から、かれらのうちには御自身をそうさせるものが何もないのに、自らがよしとなさるとき、その言葉と霊により、かれらをイエス・キリストへと招き、引き寄せて、かれらの思いを救いにいたるように照らし、また、かれらの意志を新たにし、力強く決定し、かくして、かれら自身では罪のうちに死んでいても、これによってかれの召命に進んで自由にこたえ、そこにおいて提供され伝えられる恵みを受け入れ、受け止めることができるようにしてくださる、そのような、神の、全能の力と恵みによる御業です。

これを告白すると、主なる神のご計画、主の召しと最初があり、そこに主の霊が働き、私たちが主を受入れ、主を信じる者へと招かれ、さらには主の働き人としての召しを受け、主の働き人として召されていく、ということをご理解して頂けるかと思えます。

私たちの教会では、今回新たに一人の執事を選出し、主の御霊が姉妹に働きかけて下さり、その主の導きを受け入れて下さいました。また27日に新たに一名の長老を選挙しようとしています。小会として、兄弟の召しを予め確認しました。4月には、執事・長老を、それぞれの任職式・就職式を行いたいと願っています。この機会に、私たち一人ひとりもまた、クリスチャンとして、また教会の奉仕者として、さらには社会における働きに、主により召されていることを確認して頂きたいと思えます。

主によって召しを受けたことを確認したギデオンは、主の命令に従い、主に仕えます。バアルの祭壇を壊し(28)、バアルは自ら争うという名「エルバアル」という名が与えられます(32)。そしてギデオンは300人で、ミディアン人を打ち破っていきます(7章)。

主から召しを受けたとき、分からないまま半信半疑のままで主に従おうとする必要はありません。こうした所に、サタンの誘惑があります。しかし、主に問い続け、主からの召しを確認した時、主は私たちをとおして主の御業を成し遂げられます。主の御心に聞き、主の御業を成し遂げるために、私たちは用いられます。

先週から、ウクライナにおける戦争が起きました。実際に戦争が行われている中であって、ヨシュア記におけるエリコ陥落(6章)や今日の御言葉は、絵空事のように思われるかも知れません。しかし、私たちが信じている主なる神がどういうお方であるかを私たちが知り、主なる神がどのような御力を持っておられるかを知るならば、御言葉が語ることが真実であり、神ご自身の権威を信じ、現在の出来事であったとしても、主に委ねて祈ることが求められていることが示されるのではないかと思います。

戦争と言えば、力と力、軍事力・兵力を持っている方が勝利すると思われています。しかし、ミディアン人らがいなごのように数が多いことを紹介しつつ(12)、ギデオンに対して、300人で戦いように求められます。主なる神は32000人の中から300人を選ばれました。選考に関して、強者(つおももの)だけを残されたと言われることもあります。しかし、ここで大切なことは、主なる神がわずか300人を残されたということです。

私たち人間は、どうしても目に見える世界がすべてです。視野が狭くなると力に頼ろうとします。そのために視野を広げる必要があります。視野を広げるのは、空間的な広がりばかりか、時間的な広がり、そして信仰的な・知的な広がりを広げ・深めることです。

さてギデオンが、非常に臆病であり、慎重であることを確認してきました(6章)。ギデオンが臆病で、慎重であることは、主なる神もご存じでした。

そのため、主なる神は客観的にも主の召しを指し示してください。「起きて敵陣に下って行け。わたしは彼らをあなたの手へ渡す。もし下って行くのが恐ろしいなら、従者プラを連れて敵陣に下り、彼らが何を話し合っているかを聞け。そうすればあなたの手へ力が加わり、敵陣の中に下って行くことができる」(9~11)。ギデオンが行うべきことを、主なる神は一人の男に夢で語られ、仲間の男に対してその解釈を与えることにより、ギデオンは客観的に神の御業が示されました(13~14)。そしてようやくギデオンは確信が与えられ、立ち上がる決心が与えられます(15)。

主なる神が御業を成し遂げられる時、本人ばかりか、周囲の人たちにもその召しを示され、自分の思い込みではないことが示されます。それが、自己召命(内的召命)と共に与えられる教会や周囲の人々を通して与えられる外的召命です。つまり、私たちは聖霊によって示されたからと言って、何を行ってよいわけではありません。もちろん聖霊が本人に働き主観的に主の導きを感じるのですが、同時に、周囲の人たちにも働き、客観的に主なる神の働きを確認することも大切です。だからこそ、何かを行う時、常に御言葉をとおして与えられる主観的な召しと共に、周囲の人たちに与えられた召しを確認することにより客観的な召しを確認することが大切になってきます。

主の召しが聖霊により直接示されて、さらに客観的な召しを与えられた時、主の御言葉に聞き従うことが求められます。これが信仰です。「この信仰によって、キリスト者は、御言葉において啓示されていることは何事であれすべて真実であると、御言葉において語っておられる神御自身の権威のゆえに信じ、御言葉のそれぞれの箇所が含んでいることに応じて、さまざまに行為する。すなわち、命令には従順に従い、威嚇にはおののき、この世と来るべき世についての神の約束はしっかりと受け止める」(ウ信仰告白14:2前半)。

そして主の命令に従って行動する時、主は主の御業を成し遂げてくださいます。この時、わずか300人によってミディアンを攻めたのですが、主の御業は、ミディアンがいわば自滅することにより、成し遂げられます(21-22)。

信仰と言えば、救いに関わることだけに留まるように思っておられる方もいるかとおもいます。たしかに信仰の中心的事は、救いに関わることです。「救いに導く信仰の主な行為は、恵みの契約のゆえに、義認と聖化と永遠の命を得るため、ただキリストのみを認め、受け入れ、依り頼むことである」(ウ信仰告白14:2後半)。しかし主なる神は、私たちの生活のすべてを支配しておられ、私たちの行う一つひとつの行為に対しても、召しを与え、そして命令をお語りになります(参照：1コリント10:31)。だからこそ、私たちは何をするにしても、祈りをもって主の御心を確かめた上で、客観的な召しがないかを確認しつつ、行動することが求められているのです。主の命令を無視することは許されません。

主の命令に従い、ギデオンは300人を選び出し、300人でミディアン人に勝利を遂げました(7章)。続く8章では、いろんなことが語られています。そのため注意深く読まなければ、私たちに語りかける言葉を聞くことができません。そのため、一つひとつの出来事に分けて理解しなければなりません。同時に、主なる神を信じて生きるとは何か？ このことを全体のキーワードとして御言葉を読み進めていきたいと思えます。

ギデオンが300人でミディアン人に勝利を遂げたため、エフライムの人々は最後に撃つだけであり(7:24)、手柄はすべてギデオンが持って行ったように思い、言葉を発します(1-3)。

しかしギデオンは自らの手柄にしません(2-3)。主なる神が300人で勝利をお与えくださったのであり、エフライムの人々をないがしろにしたのではないことを説明します。

つまり、私たちが主なる神を信じて生きようとする時、自らの手柄にするのではなく、主なる神が何を求めておられ、私たちに何を求めておられるのかを知ることが大切です。

次にスコト、ペヌエルの人たちです(4-17)。彼らはヨルダン川の東岸に暮らしていたイスラエル人でした。ですから助けを求めるギデオン率いる300人が休息と食事を求めたことに対して、隣人としてそれを行うことが求められています。しかし彼らはそれを拒否しました。ギデオン軍とミディアン人とを両天秤にして、今、ギデオンたちを手助けすることにより、ミディアン人からの攻撃をうけることを恐れた結果、日和見(ひよりみ)主義です。

このことに対して、ギデオンはミディアンに勝利を遂げた時、彼らに対して主の裁きもたらされることを事前に警告しました(7,9)。そしてギデオンがミディアン人に勝利した結果、スコトとペヌエルの人たちに裁きがくだされます(15-17)。

状況を判断することは大切ですが、主なる神が明らかに働いておられる時、主の御業を信じ、行動することが求められています。

私たちは、自信がなくおじけながらも主なる神の御声に聞き従うギデオンの姿を確認してきました(6-7章)。そしてヘブライ書11章に記されている旧約の信仰者たちの一人に、ギデオンの名があります(11:32)。

しかし聖書に名が記された人々であっても、あるいはルターやカルヴァンといった宗教改革者であったとしても、一人ひとり、主なる神によって罪赦された罪人である事実を、私たちは忘れてはなりません。

主なる神はミディアン人を滅ぼし尽くすことを求めておられ、実際にギデオンはそれを実行していますが、彼の本心も語られています(19)。つまりギデオンは、自分の兄弟たちがミディアン人によって殺されたことの復讐心をもって彼らを殺していました。主が命じられ、その通りに行ったとしても、ここでギデオンの行ったことは復讐心の伴う殺人です。

イスラエルの人々は、ギデオンに王となり、イスラエルを治めるように求めますが、ギデオンが信仰に基づき、それを断りました(22-23)。「わたしはあなたたちを治めない。息子もあなたたちを治めない。主があなたたちを治められる」。すばらしい信仰です。

しかしギデオンはその後、ミディアン人・イシュマエル人から奪った金の金具を差し出すように求めます。このことは、ギデオンが自らの権力を誇示していることであり、先の言葉が、心から語られたことであるかが疑問となります。

こうしたことがどのような結果をもたらすのか、27節で語られます。「ギデオンはそれを用いてエフォドを作り、自分の町オフラに置いた。すべてのイスラエルが、そこで彼に従って姦淫にふけることになり、それはギデオンとその一族にとって罠となった」(27)。エフォドとは、主なる神がモーセに幕屋を建設する際に祭司が付けるものとして作成が命じられたものです(出エジプト記28章)。ですから祭司が付けるものであり、それを個人のものとする自体、不信仰です。このように、ギデオンが王としてイスラエルを治めること、あるいは祭司として主に仕えることを自らのものとした結果、イスラエルは姦淫にふけることになり、罪をもたらす結果となっていきます。

奨励の題を、「主なる神を信じて生きるとは……」としましたが、主なる神への信仰が、その時そのときの言動に表れてきます。自分の都合の良いような信仰に陥り、自己優先の言動を行ってはなりません。

【祈祷会奨励】「野心に生きる者」士師記9章、ウエストミンスター信仰告白6:6 (3/16)

士師記8章において、ギデオンであっても名声を誇り、王としての権威、祭司の働きに用いられるエフォドを自らのものにする誘惑に陥ったことを学びました。

士師記9章では、エルバアル（すなわちギデオン）の子であるアビメレクが、ギデオンに与えられた人々の賞賛を自らのものにしようとする野心が描かれていきます。ギデオンは、主なる神のみが統治者であり、自らも息子たちも王となることを断っていました(8:22-23)。しかしアビメレクは、自らが王として君臨し、シケムを治めようとします(2)。そして身を隠して生き延びたヨタムを除く、ギデオンの息子たち70人を皆殺しにします(5)。

野心を持ち、自らの権力を誇ろうとすると、兄弟であろうと殺害の対象となります。ロシアとウクライナは、兄弟国であり、人種的なつながりも深い関係にあります。今回の戦争が、アビメレクが犯した罪と同様のことを行っていると言ってしまうのが、野心的な人々には、罪の中に生きるとき、手段を選ばなくなります。

このとき、唯一生き延びたギデオンの末の息子ヨタムがシケムの人々に対して語り始めます(6~20)。ここにおいて、ヨタムはシケムの人々を木々に例えて語ります。木々は、オリーブの木、いちじくの木、ぶどうの木に対して、それぞれ「王(女王)になってください」(8, 10, 12)と頼みますが、それぞれ断られます。そして木々は最後に、茨に「それではあなたが王になってください」と頼みます(14)。このとき茨は木々に語りかけます(15)。

そもそも茨とは、葉を茂らせることなく、木陰に隠れることなどできません。むしろ、とげがあり、痛みを伴います。また茨は、着火しやすく、乾燥地帯では自然発火の火事が起こりますが、そうした原因となります。

まさに、茨を王とすることは、本来してはならないことを行うことです。これは日和見主義のシケムに対する警告の言葉です。そしてシケムがアビメレクを王とすることにより、「もしそうでなければ、アビメレクから火が出て、シケムの首長たちとベト・ミロをなめ尽くす。またシケムの首長たちとベト・ミロから火が出て、アビメレクをなめ尽くす」(20)と語り、アビメレクの死と同時に、アビメレクを王としたシケムの裁きが預言されます。

ヨタムはこの後逃げ去り生き延びますが(21)、このヨタムの言葉は、主から託された預言であり、この後、それが実現していくこととなります。

そのことが23節以降で語られていくこととなります。裁きは主なる神の御業であることを、私たちは忘れてはなりません。「神はアビメレクとシケムの首長の間、陰悪な空気を送り込まれたので」と訳されていますが、「悪霊」(口訳)、「わざわいの霊」(新改訳2017)と訳されています。アビメレクの死とシケムの裁きは、主なる神の御業として行われます。そして3年間はやかったのですが、その後、野心に生きるアビメレクと日和見主義のシケムの間に、不協和音が生じ、裏切り、殺し合うこととなります。

この時エベドの子「嫌悪」という意味を持つガアルが用いられます(26)。ガアルは略奪隊の長であり、身内の者たちと共にシケムに移住します。ガアルは町の住民の信用を得て、不在の王アビメレクをあざわらい、権力を得ようとします。ガアルとカナン人であったように見える身内の者たちは、シケムの民を扇動して、イスラエル人アビメレクを廃し、生粋のカナン人の支配者を回復しようとします。シケムのつかさぜブルは、ひそかにこの情報をアビメレクに流し、アビメレクは夜の間にシケムに向かい、ガアルとその従者を敗走させ、さらにシケムの反逆者を許さず、彼らをことごとく殺害し、町を破壊していきます。

一方アビメレクは、一人の女がアビメレクの頭を目がけて、挽き臼の上石を放ち、頭蓋骨を砕いた(53)。女性に命が奪われることは、非常に不名誉な死であります。しかし、シケムの人々も、アビメレクも結果として死へと、滅びへと導かれます。

今の時代でも、罪を犯してもあぐらをかいている人々がいます。しかし、主なる神は、どのような罪をも見過ごすことはありません(ウエストミンスター信仰告白6:6)。キリストが再臨され、最後の審判を行われます。野心に生きる者、独裁者が生き延びることはありません。主はその裁きを行ってください。今、ウクライナにおいて行われていること、また虐待・虐げ・迫害の中にある人々においても、支配者にもたらされる裁きが確実です。私たちはこのことを覚え、主にすべてを委ねて祈り続けることが求められています。

【祈祷会奨励】「背信のイスラエルと神の愛」士師記10章、ウ大教理78, 79 (3/23)

6～8章ではギデオンについて語られ、9章でその息子アビメレクの罪について語られてきました。そして10章に入り、6番目の士師トラ、7番目ヤイルが記されます。この二人は、主によって士師として立てられ、イスラエルを統治したことだけが記されます。

節以降では、士師記のパターンでありますイスラエルの背信・主による裁き・イスラエルの民が主に立ち返り哀れみを求めて叫ぶことが語られていきます。2人の士師（トラ・ヤイル）に関して聖書では簡潔に記しますが、トラが23年、ヤイルが22年、士師としてイスラエルを裁きました。ギデオンの息子アビメレクの時代から45年、さらに18年の年月が流れています(8)。2世代・3世代後のことであることを忘れてはなりません。その間に、人々の生活・信仰観はすっかり変化していたのです。

日本において、第二次大戦後、戦後の教会成長期を迎えますが、靖国闘争に代表される信仰の戦いの時期があり、1994-95年のオウム真理教が現れることにより日本人の信仰観が変わります。そして、東日本大震災、コロナ禍と、自然災害・疫病が訪れます。ですから「イスラエルの人々は、またも主の目に悪とされることを行った」ことは、何も驚くことではありません。

イスラエルの人々は7つの神々に仕えます(6)。一つひとつがどのような宗教であったのか、詮索する必要はありません。7つの偶像に仕えることにより、イスラエルの人々は完全に主なる神を捨て去ったことが示されています。

イスラエルの民は、40年の荒れ野の歩みの後、約束の地が与えられました。主なる神が「原住民を滅ぼし尽くせ」と命じられながらも、イスラエルの民は原住民と共存の道を選びました。それは偶像との戦いの始まりでもありました。そのため、幕屋における神礼拝がおろそかになっていったのではないのでしょうか。旧約のイスラエルの民にとっての神礼拝、つまり聖所における生け贄・割礼・過越といった神礼拝がおろそかになっていた結果、主を捨て、偶像に仕える民となりました。

このとき、主なる神がイスラエルの人々を異邦人により苦しめます。イスラエルの民は、様々な偶像にあたりながら、最後の最後に主なる神に助けを求めて叫びます(10)。

このとき主なる神は、7つの国々をあげ、「あなたたちがわたしに助けを求めて叫んだとき、わたしは彼らの手からあなたたちを救ったではないか」とお語りになります(11-12)。つまり、主なる神は、イスラエルと共にいつも一緒に歩んでくださり、イスラエルが助けを求めると、主は助けてくださったことを語ります。

それにも関わらず、イスラエルの民は主を捨て、他の神々に仕えたのです。「それゆえ、わたしはもうあなたたちを救わない」(13)と語り、主はイスラエルを突き放します。主なる神は、イスラエルの本気度、真の悔い改めを求めておられます。生きて働く主なる神と、何もできない偶像とどちらを選ぶのかとの主の訴えです。単に言葉のキャッチボールではなく、体と体をぶつかり合った戦いを行っているイメージを持ってもらえればと思います。

こうしてようやく、イスラエルの民は罪を悔い改め、偶像を捨て去り、主に仕えるようになります(15-16)。主なる神がそれほどまでしないと、イスラエルの民は、自らの罪を知り、悔い改めることはできません。現在、日本で起こっていること、世界で起こっていることを、他人事としてはなりません。主なる神は、私たちキリスト者に対して、本当に主なる神を畏れ、主を信じ、主に委ねて生きているのかと問いかけているように思います。

そして私たちが忘れてはならないことは、「主はイスラエルの苦しみが耐えられなくなった」ことです(16b)。主は、イスラエルが偶像に仕えていたこと、主を捨てたこと、その上で異邦人による虐げを受けたことを、つぶさにご覧になり、心を痛めておられます。主なる神のご計画、主なる神のイスラエルに対する愛は、変わることはありません。ここで語られている主の思いは、本来神の民であるイスラエルが、主なる神を捨て、偶像に従っている姿に心を痛められていることを、私たちも忘れてはなりません。そして、放蕩息子のように、すべてを失い、自らの罪深さが示された結果、主に立ち返るイスラエルを、無条件に受け入れ、助け、救いへと導いてくださる主なる神がここにおられます。

10章では7つの偶像に仕えイスラエルの罪がより深くなっていることが指摘されています。それにも関わらず、主はイスラエルに士師エフタをお立てくださいます。

ギレアドの子エフタは、遊女の子であったため、ギレアドの妻の子どもたちから、さげすまされ、そして家を追い出され、ならず者たちと行動を共にするようになります。

その後、イスラエルがアンモンの人々から戦争を仕掛けられたとき、ギデアドの長老たちはエフタを連れ戻しにやってきます。「帰って来てください。わたしたちの指揮官になっていただければ、わたしたちもアンモンの人々と戦えます」(6)。彼らの思いは、次のエフタの言葉に表れています。「あなたたちはわたしをのけ者にし、父の家から追い出したではありませんか。困ったことになったからと言って、今ごろなぜわたしのところに来るのですか」(7)。彼らは、自分たちが率先して町を守るのではなく、ギレアドを盾にして、難を逃れようとする姑息さがここに表れています。

そのことは6節では「指揮官」と語っているところを、エフタの要求に従い8節では「頭」と言い換えていることにも表れています。つまり指揮官であれば戦いが終われば用済みですが、頭となれば、戦い終了後もギレアドの人たちはエフタに仕えることが求められます。

「主の霊がエフタに臨んだ」(29)。主なる神がエフタと共におられます。主によって召され、主の御声に聞き従う信仰者であれば、主を全面的に信じ、主にすべてを委ねればよいのです。そして私たちキリスト者も同じです。しかしエフタは主に対して誓いを立てます。「もしあなたがアンモン人をわたしの手に渡してくださるなら、わたしがアンモンとの戦いから無事に帰るとき、わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る者を主のものといたします。わたしはその者を、焼き尽くす献げ物といたします」(30)。無条件に主なる神を信じることができなかつた言動であると言わなければなりません。

請願に関して、最初にウェストミンスター信仰告白を告白しました。主への礼拝行為であり、それを果たすことが求められます。信仰告白では、誓ってはならないことに関して、7節後半で「これらの点で、終生の独身・修道者となるための清貧・上長者への従順、という教皇主義の修道誓願は、より高い完全性の段階であるどころか、迷信的で罪深い畏であり、キリスト者はだれも、そのようなもので身動きをとれなくしてはならない」と告白していますが、人を生け贄と献げることは、異教宗教の行っていることであり、主なる神がそのようなことを求められることはありません(参照:エレミヤ7:31-32)。つまりエフタは、ならず者たちと行動を共にしたのですが(3)、同時に偶像に仕えていたのです。

「こうしてエフタは進んで行き、アンモン人と戦った。主は彼らをエフタの手にお渡しになった」(32)。主なる神がエフタに勝利をお与えくださいました。そのためエフタは、戦いを終えて帰った時、家の戸口で最初に迎えに出て来る者を、主への焼き尽くす生け贄として献げることが求められます(31)。そして最初にエフタを迎えたのが一人娘でした。誤った信仰行為の代償を、エフタは娘を生け贄に献げることにより負うこととなります。

12章の後半は、イブツァン、エロン、アブドンと言った士師が登場しますが、名前のみを確認すれば良く、最後にエフライムの人々に関して確認します(12:1-7)。

エフタが勝利を遂げたことに対して、エフライムの人々が自分たちも戦争に加担したかったと申し出ます。そして、「アンモン人との戦いに出向いたとき、なぜあなたは、わたしたちに同行を呼びかけなかったのか。あなたの家をあなたもろとも焼き払ってやる」(1)と語り、不平をぶつけます。それは、エフライムの人たちが、勝利の手柄を自分たちのものとしたかたに過ぎないわけで、エフライムの人たちは、アンモン人との争いの時に、エフタの援助要請に対して、エフライムはエフタを助けることはありませんでした(2, 3)。

このようなエフライムの人たちの身勝手さをエフタは赦すことができず、個人的な感情により、ギレアドの人たちと共に、エフライムの人々を裁きます。

このように、イスラエル全体の罪は、ギレアドの人々、そして士師とされたエフタ、さらにはエフライムの人々にまで及んでいることを、聖書は言及します。

それでもなお聖書は、主の恵みによりエフタが士師であること(12:7)、ギデオンのバラク、サムソンと共に、旧約における信仰者の一人として数えます(ヘブライ11:32)。

イスラエルが罪を犯し、40年間主の目に悪とされることを行っていた結果、イスラエルはペリシテ人によって苦しみが与えられます。このときに立てられる士師がサムソンです。今日の御言葉では、サムソンの生い立ちについて語られます。別の言い方をすれば、主なる神は、生まれる前からサムソンを士師として立てるためにご計画されていたのです。

サムソンは不妊の女から生まれることが約束されていますが、聖書では不妊の女が身ごもることを、重要な場面で繰り返し語ります。アブラハムの妻サラ、そして洗礼者ヨハネの母となるザカリアの妻、エリザベトです。これらは、高齢になってから与えられた子どもが、主から大きな使命が与えられることで共通しています。

また主なる神が、直接・天使たちをとおして、子どもが与えられる約束をお伝えくださることも共通しています。主なる神は、ご自身のご計画を、黙ったまま実行されるのではなく、言葉によって預言・予告されることにより、主の御業を実行に移されていきます。だからこそ、キリスト教は言葉の宗教、預言の宗教と呼ばれます。

最初に主の御使いは、不妊の女マノアの妻に突然現れ語り始めます<sup>(3-5)</sup>。彼女にとって突然のことであり、何が起こり、何が語られたのか分からなかったのではないのでしょうか。もちろん一つひとつの言葉の意味は分かるのですが、それが何を意味しているのか分かりません。そのため、ただ主の御使いが語った言葉を、真意も分からず、夫に語るしかありませんでした<sup>(6-7)</sup>。このとき、マノアは信仰的な対応を行います<sup>(8)</sup>。その結果、改めて主の御使いが妻に現れ、そして夫のマノアも主の御使いと語り合う機会が与えられます。

私たちに直接、神や神の御使いが語りかけることはないかと思いますが、私たちにも、突然の出来事が起こることがあります。突然、人から思ってもみなかったことが語りかけられ、戸惑うことがあります。夢で何か指し示されるかも知れません。こうした時、私たちは、自分であたふたしつつ解決しようと試みるのではなく、マノアのごとくに、主の御前にこの出来事の真意を確かめ、その答えが与えられるように祈ることが求められます。主なる神は、私たちに何か行動を求める時、必ず答えをお与えくださいます。その時その時、それぞれに答えは違うでしょうが、はじめに示されたこととは別の形で、与えられた御業が真実であることを確認する結果が与えられます。それは信仰を告白する時であり、就職・結婚の時であり、人生の転機となる時となります。それは良いことばかりか、病気になる、自然災害に遭うなど、苦しみ・重荷を負わなければならないこともあるかも知れません。主はいつも私たちと共にいて、守り導いてくださいます。そのため主がお与えくださった道であることが示される時、私たちは主に委ねてその道を歩むことができます。

マノアと妻に与えられる子どもは、ナジル人であるため、妻もその子どもも神の御前に誓約することが求められます。ナジル人の請願に関して、民数記6章で規定されています。サムソンは「頭にかみそりを当てなかった」ことからナジル人であると思いますが、聖書ははっきりと語りません<sup>(サムエル上1:11)</sup>。他にナジル人であろう人は聖書に何人かですが、具体的に名前が記されているのはサムソンだけです<sup>(参照：哀歌4:7、アモス2:11-12)</sup>。

ナジル人が行わなければならないことは、第一にぶどう酒・濃い酒を断つことです。ぶどうの木からなるものはすべて食べてはなりません。第二に、頭にカミソリを当ててはなりません。サムソンの場合、このことが身の振り方に関わってきます。そして第三に、肉親を含めて親しい人が亡くなったときも、死体に近づいてはならないことです<sup>(民数記6章)</sup>。

主の御使いがマノアとその妻に語りかけたことを、二人は聞き従い、マノアの妻はナジル人の母となるべく、自らも請願し、ぶどう酒を断ちます。この結果、サムソンはナジル人としての特別な力が与えられ、その結果イスラエルに勝利が与えられていきます。このことは、サムソンが主なる神の御手にあって力が与えられており、主なる神から離れたところに人間サムソンには何の力もないことが示されようとしています。

私たちが請願する場合、それは信仰告白の時や役職に就くときに行う誓約を行い、主の御前に厳粛に受け入れなければなりません。信仰が与えられること、主の働き人として召されることも、すべてが主の御業であり、主の導きがあります。主の御業の内に恵みと祝福が与えられていることに感謝と喜びをもって、主に仕えていくことが求められています。

サムソンは、士師を代表しており、ヘブライ11:32においても、その名が紹介されています。しかしサムソンの人間としての生き方は、決して褒められたものではありません。

前回、サムソンの誕生の次第を学び、彼がナジル人としての請願を行う者として生まれたことを紹介しました。ナジル人の規程は民数記6章に記されています。ナジル人が行わなければならないことは、第一にぶどう酒・濃い酒を断ち、ぶどうの木からなるものはすべて食べてはなりません。第二に、頭にカミソリを当ててはなりません。そして第三に、肉親を含めて親しい人が亡くなったときも、死体に近づいてはならないことです。

しかし聖書が語るサムソンは、ナジル人として、イスラエルとしてふさわしいか疑問に思わざるを得ません。サムソンはペリシテ人の娘に目を引かれ、そして結婚をするために両親に紹介します。このことは、イスラエルの民として異邦人と結婚すること、そして両親に反対されてでも結婚しようとすることは、イスラエル人として禁じられています。

第二に、ナジル人としての力を用いて獅子を裂き殺しますが<sup>(6)</sup>、獅子の屍に蜂蜜が付いていたので、死んだ獅子に近づき蜜をかき集めます<sup>(8-9)</sup>。ナジル人として、死体に近づいてはならないことに対する違反です。サムソンはこの行為を恥じ、この事実を両親には隠します<sup>(9)</sup>。またサムソンは自らの婚礼を行うために宴会を催します<sup>(10)</sup>。ナジル人として酒を断つことが求められているサムソンが宴会を催すことは、ナジル人としてふさわしい行為ではなかったと言えるのではないのでしょうか。ただこれらは、人間の遺体には近づいていないこと、サムソン自身が酒を飲んだことが記されていないことからして、厳密な意味では、ナジル人としての誓約を破ったままでとは言えません。このことはこの後、サムソンがナジル人としての力を用いることができたことに表れています。

宴会の席で、サムソンはなぞときを行います。こうした知恵は、ナジル人として召されていたサムソンに特別に与えられていたものと考えられます。このとき、サムソンは愛した女性に泣きつかれ、秘密である答えを打ち明けることとなります。ここにおいても、サムソンの人間らしさ、だらしなさが露わになります。その結果、サムソンはなぞときに負けることとなります。その結果、第一の事件が発生します。サムソンはナジル人としての力を用いて、アシュケロンに下って30人を打ち殺しにします。これは単なる腹いせです。

しかし聖書は「そのとき主の霊が激しく彼に降り」<sup>(19)</sup>、「主の御計画であり」<sup>(4)</sup>と語り、サムソンの行動は、人間的には褒められたものではなく、情けなさを感じますが、すべて主なる神によって受け入れられており、主のご計画に組み入れられていることを聖書は語ります。そのため、ここでのサムソンの行動は、厳密な意味では、ナジル人としては逸脱した行為ではなく、サムソンは力を失うことなく、それを用いることができました。

サムソンの行動に対して、彼女の父はサムソンが彼女と会うことを拒否します<sup>(15:1)</sup>。このことに対して、サムソンは子供じみたというか、人間味のある復讐を、父親に直接ではなく、ペリシテ人に対して麦畑を焼き払う行為にでます<sup>(3-5)</sup>。

そうすると当然ペリシテ人は怒ります。ペリシテ人も、サムソン本人ではなく、彼女とその父親を殺します。こうなるとサムソンも黙ったままでおれず、報復を行い、彼らを徹底的に打ちのめします<sup>(8)</sup>。泥沼です。一度争いが始まると、收拾が付かなくなります。

こうなるとペリシテ人は、ユダに攻め上ってきますが、ユダの人々は、サムソンをペリシテ人の手に渡すことをペリシテに約束します<sup>(13)</sup>。ペリシテに虐げられていたイスラエルという力関係がここで表れています。

人間的なドロドロとした状況の中、主の霊がサムソンに降ることにより<sup>(14)</sup>、サムソンはペリシテ人に勝利し、士師としての働きをまっとうします。サムソンの生き方は褒められたものではありませんが、主はサムソンを用いて主の御業を成し遂げられます。

今現実には起きている戦争に対して、どこに主なる神の意図・ご計画があるのか、私たちに分かりません。しかし、主なる神は、この戦争においても神の御業があり、そしてそのことを主は成し遂げようとしておられます。だからこそ、主なる神の目的が成し遂げられ、それが私たちに示されること、それと同時に、実際に生命の危機を迎えている人々のために、私たちは祈り続けることが求められているのだと思います。

【祈祷会奨励】「サムソンの祈りと悔い改め」士師記16章、ウ信仰告白15:2 (4/27)

引き続き、士師サムソンの話しが続きます。新約聖書では、サムソンも旧約聖書の信仰者の一人として名前が記されていますが（ヘブライ11:32）、決して立派な信仰者とは言えないことを確認しています。今回は、異邦人（偶像）との関係、父母を敬うことについて、またナジル人として召されながら、それにふさわしい生活をしているかについて確認しました。

また、異性に対するだらしなさが極まっているのではないのでしょうか。異性との関係が、異邦人、さらには偶像とつながっていることを、サムソンは十分に理解できるはずですが、そのことを認識していつつ、こうしたことを行っていたのか、それとも、こうしたことを認識すらできなかったのか、聖書はこのことを突き詰めて記すことはしません。

通常、この章の話しを行う場合、サムソンをそそのかす女性デリラにも着目するかと思いますが、デリラの行いがけしからんと言ったところで、それで終わりです。ですから今回は、デリラから繰り返し、懇願することに対して、サムソンが次第に折れて、デリラの要求を受け入れるようになったサムソンの言動に着目したいと思います。

私たちはすでに14, 15章の御言葉を確認しました。そのところで、サムソンは、ペリシテ人のティムナの女に恋をし、そして結婚しました。しかし、彼女からサムソンが出した謎解きの答えを求められ、それを教えてしまいました。その結果は、ペリシテ人たちが、謎解きを解くことにより、サムソンが謎解きに破れました。

サムソンは苦汁をなめさせられたと言って良いかと思います。多くの士師たちが、名前だけしか記されず、何をしたのかすら分からない状態で、聖書がこうした事実を書き残すわけであり、サムソンにとっても、大きな出来事であったはずです。

しかし、サムソンの行っていることは変わっていません。女性に対するだらしなさも変わっていません。ここに人間の罪の本質があるのではないのでしょうか。人は学習する、進歩すると言われていています。そのため、時として「若いときは苦勞しろ」と言われることもあります。確かに、仕事を身につける、経験を積むことは、大切なことです。目的を理解した上で行うとき、その後の成長に大きく役立つかと思います。しかし、大きな失敗をしたとしても、罪を犯したとしても、それが自分の犯した失敗・罪であることを自覚していなければ、それは繰り返されていきます。いくら他人から指摘されたとしても、怒られたとしても、自分の過失を理解することはなく、同じ失敗を繰り返します。

サムソンも、前回の失敗から学ぶことはなく、自分が失敗したとは思っていなかったのではないのでしょうか。結果として、主の霊がサムソンと共にあり、ペリシテ人を多く殺し、主の御業が成し遂げられ、成功したかのように見えるからです。サムソンは、この成功故に、自らの過ちに気がつかなかったと言ってよいかと思います。その結果、16章において、繰り返しデリラにそそのかされることにより、サムソンはナジル人の秘密をデリラに語り、サムソンは主から賜った力が抜け、そしてペリシテ人に捕らえられることとなります。

サムソンは、力が抜け、捕らえられ、目をめぐり出してガザに連れて行かれ、青銅の足枷をはめさせられ、重労働が強いられました。このとき、今までの自らの姿を顧みる時が与えられたのではないのでしょうか。そしてサムソンは真に悔い改め、主なる神により頼み、祈ります（16:28）。この祈りは真の悔い改めです（参照：ウェストミンスター信仰告白15:2）。そのことは「わたしの命はペリシテ人と共に絶えればよい」（30）と言って、力を込めて押した。この言葉と行いに表れていると言って良いかと思います。

私たちはどうしても、自らの言動を否定することができず、擁護し反省することができず、むしろ他人の言動を否定してしまいます。特に成功している時は、反省することができません。しかし、主なる神が共にあり、主の恵みに満たされいている時であっても、サムソンのごとくに私たちは罪を繰り返し、失敗しています。こうした一つひとつの言動を私たちは自ら省み、そこにある主の恵み・祝福・主の憐れみ・赦しを顧みるものが求められています。

大宮教会の今年の標語は「主の支配に生きる－謙遜と自己否定によって」です。そして、聖句としてガラテヤ5:22～23を挙げています。ガラテヤ5:16～25をじっくりとお読み頂きたいと思います。

最後の士師サムソンが働きを終えた後、「そのころイスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に正しいとすることを行って」ました (17:6、18:1、19:1a、21:25)。こうしたイスラエルの混乱は神を求めることなく、各々が自分勝手に生きた結果です。

17章ではミカの家族により問題が明らかになります。ミカは母のお金を奪いますが、反省することもなく母にその事実を打ち明けます<sup>(2)</sup>。それに対して母はミカに主の祝福を祈ります<sup>(2)</sup>。本来は主の御前に、罪を叱責し、悔い改めを迫らなければなりません。さらに母は息子のために偶像を作ります<sup>(3)</sup>。さらにミカは自ら神殿を持ち、息子を祭司として、偶像崇拜を行います<sup>(5)</sup>。

神の御言葉から離れ、主なる神がどのようなお方であるかを忘れた時の状況がここで語られていきます。主なる神が忘れられ、主の御言葉に聞かない結果、神殿・祭司という言葉は残りますが、本来の働きを行う者はなく、自らの欲望を実現させるための道具として用いていると言うことができるかと思えます。

次に登場するのが、ユダ族の一人の若者です。「ユダのベツレヘムに、ユダ族の一人の若者がいた。彼はレビ人でそこに寄留していた」と記されています<sup>(7)</sup>。これは非常に奇妙な記述です。レビ人は、本来、レビ族アロンの子孫に与えられた役職です (民数記3:6-10)。つまりユダ族に属していることからして、レビ人として祭司となることは、死刑に処せられることです。

しかし彼は、ミカの所にたどり着き、彼個人の祭司としての働きを始めます。

そればかりか18章では、ダン族が攻めてきた時、彼は、ミカから離れ、ダン族の祭司としての働きを始めます。誰に付けば得か、多くの収穫を得ることができるかということを考え、行動している結果です。彼には元来、祭司としての資格すらありませんが、主の働き人としての志も、まったくないと言わざるを得ません。

そして18章では、ダンの部族が住み着くための嗣業の地を探し求めていたことが記されています。各部族の嗣業の土地に関しては、ヨシュア記13～19章で語られており、ダン族も嗣業の土地が与えられていました (ヨシュア19:40～48)。ダン族は、主がお与えくださった土地をしっかりと確保することなく、アモリ人によって山地に追込まれ、平野で下りて来ることが許されなくなっていました (士師1:34)。このため、改めて自らの土地を得るために移動を始めようとします。主がお与えくださった嗣業の地以外の土地を得ようとすることは、主なる神によって認められた行為ではなく、正当性がどこにもありません。

このことは、決して小さなこととして考えてはなりません (18:27-31)。ここには、ミカが作った彫像を拝み続けていること、そしてここでその地の民が捕囚とされる日までと語られています。つまりこの行為は、イスラエルが滅びる大きな要因として残ることを聖書は語ります。ちなみに、「捕囚」という言葉が、聖書にでてくるのは、ここが最初です。

そして「捕囚」を語ることは、その後のエルサレム再建との関連で考えなければなりません。メシアとしてのイエス・キリストにつながります。そして、新約においてイスラエルの12部族に脚光が浴びるのは、唯一ヨハネの黙示録7章1～8節です。ここで各部族12000人、12部族で、144000人の救いが与えられることが語られます。12は完全数であり、すべての民族のすべての神の民が救われることを語っています。このとき、ここで記されている12部族のリストを確認して頂きたいのです。ユダが始めにあります。後は、ルベン・ガド・アシェル・ナフタリ・シメオン・レビ・イサカル・ゼブルン・ヨセフ・ベニヤミンであり、それにヨセフの子マナセが記されています。旧約においては、レビに嗣業の地が与えられないことから、ヨセフではなく、マナセとエフライムが記されていましたが、黙示録では、ヨセフがあり、マナセもあります。そして、ここで抜けているのがダンです。ダンが救いのリストから外れる理由は、聖書の他の箇所からは考えることができません。イスラエルの各部族は、様々な罪を繰り返しますが、しかし、嗣業の地を自ら変更し、獲得したこと、彫像を拝み続けたことは、主の御前に大きな罪であり、結果として、神の刻印すら押されない異邦人として聖書が記す結果になったということができるとは思いません。

士師記のエピローグの始まる17:6、そして最後の21:6で「そのころイスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に正しいとすることを行っていた」と語り、イスラエルの腐敗が語られています。しかし、18:1, 19:1では、「イスラエルには王がいなかった」とだけ記します。王がないことを強調することにより、この後にイスラエルが王を求め、そして主によって王が立てられていく伏線とって良いかと思えます。

士師や王がない時、本来であれば宗教的な指導者である祭司・レビ人が民を指導し、靈性を保つことが求められます。しかしイスラエルの民が腐敗に満ちるとき、宗教的指導者も腐敗していました。教会の社会に対する影響力が衰退している今、牧師や長老、キリスト者が社会と同じように腐敗していないか、自らに問いかけなければなりません。

倫理的な秩序の乱れは、夫婦間の秩序も乱れます(19:1,2)。側女を持つこと自体、夫婦間の秩序の乱れの表れですが、側女が主人を裏切ることも、その延長線上にあります。「裏切る」と訳されている言葉は、「淫行する」という言葉です。

レビ人と側女が帰ろうとしている途中、ベニヤミン領のギブアに入って泊まろうとします(19:14-15)。当時は、旅人をもてなすことは当然のことでしたから、よほどのことがなければ、突然訪れた旅人であっても、招き入れ一夜の宿として貸していました。しかしこのギブアの人々は、一人の老人を除いて、誰も泊めてくれる者はいませんでした(15-16)。ここにベニヤミン族の人々が、律法に従う意思のないことが明らかになります。

またベニヤミンの人々は、レビ人を知ろうとします(22)。「知る」とは、「性的に知る」ことです。ここにおいてもベニヤミンの人たちの罪が明らかになります。しかしここでは、宿を貸してくださった老人、さらには横にいたレビ人の罪も明らかになります(23-24)。老人にとっては、レビ人さえ守られれば良いわけで、自らの娘、さらにレビ人の側女が、どのようになっても良い、との倫理観が露わになります。またレビ人も、そのことを何の躊躇もなく受け入れ、無関心です。その結果、娘と側女は、一晚中朝になるまでもてあそばれます(25)。そして側女は生命を落とすこととなります。この時のベニヤミンの人々の罪は目に余るものですが、この後のレビ人の行いも大差ありません。ベニヤミン族の人々の罪を明らかにするための行為でしょうが、側女の遺体を12の部分に切り離し、イスラエルの全土に送りつける行為は、決して受け入れられるべき行為ではありません(29)。

イスラエルの人々にレビ人は証言します(20:4-7)。ならず者の犯行をギブアの人々(ベニヤミン族)全体に責任を押しつけ、自分が側女と老人の娘を渡したことも語りません。

このときイスラエルの人々は一団となり、一人の人のようになり立ち上がります(1, 8, 11)。聞いたことは、センセーショナルな出来事です。しかし、この一つの罪が突出した極悪な罪ではなく、他の民族も同様の罪があったと言わざるを得ません。人は、一つの情報に対して、真偽を確かめることなく、感情的に盛り上がり、集団になって裁いてしまいます。

しかしどれだけ極悪な罪であっても、ベニヤミン族を滅ぼすことを、主は求めておられません。なぜならば、彼らはベニヤミン族を滅ぼそうとしますが、滅びることはありませんでした。聖書歴史において、ダン族は神の民のリストから外されていたことを前回確認しました(黙示録7:1-8)。しかし、ベニヤミン族の名が記されています(黙示録7:8)。主なる神は、このときのベニヤミン族の罪は裁かれるものであることを士師記で語りますが、しかし民族全体が滅ぼされ、神の民から消し去られる罪ではないことを、聖書は語っています。

キリストは、彼らのためにも十字架に架かり、罪を赦し、贖いをお与えくださいました。私たちは新約の時代に生きています。戦争が行われ、迫害・虐待も行われています。社会的な乱れも少なからずあります。こうした時代にも、私たちは、キリストの御業により、罪が赦され、神の子とされ、神の御国が示されています。だからこそ、為政者が罪に満ちて誤ったことを行い、社会全体が乱れた世となっても、私たちはキリスト者として、光を照らし、社会的秩序を築いていくことが求められています。キリストは、教会の王・祭司・預言者として、私たちを導いてくださいます(ウ大教理問42)。本来、為政者が担わなければならない王としての職務を、彼らが担うことができないのであれば、教会が、そして私たちキリスト者が、地の塩・世の光として担っていくことが求められています。

21章は前回19～20章の続きとなり、最初に前回のことを確認します。あるレビ人とその側女が、ベニヤミンの町ギブアに入り、一人の老人の所に宿を借りた時、ベニヤミン族のならず者(19:22)が押し入ってきました。このとき、老人は側女と老人の娘を彼らに渡したため(19:24)、彼らは女性たちをもてあそび(19:25)、そして側女は死を遂げました(19:28)。このときこのレビ人は、側女の死体を切り刻み、イスラエルの各部族に送り(19:29)、ベニヤミン族の罪の結果であると吹聴した結果(20:4-7)、イスラエルはベニヤミン族を裁きました。しかしこれはならず者たちの罪であり、主なる神はベニヤミン族を滅ぼす意思がないことを、黙示録7章により、私たちは確認しました。つまり、あるならず者たちの罪をベニヤミン族全体の罪としたこのレビ人の罪は大きいのです。

こうしたことが行われていた背後において、「イスラエル人は、『我々はだれも自分の娘をベニヤミンに嫁として与えないことにする』、『ベニヤミンに嫁を与える者は呪われる』と誓います」(21:1,8)。

本来、誓い(請願)は、主なる神に対して、信仰的行為、宗教的礼拝の一要素として行わなければなりません。「それが受け入れられるためには、任意で、信仰と義務感とから、受けた憐れみに感謝して、あるいは、求めているものを得るために、なされるべきである」(ウェストミンスター信仰告白22:6)。「いかなる人も、神の言葉において禁じられていること、神の言葉において命じられている義務の遂行を妨げること、あるいは、自分の力にあまり、しかもそれを成し遂げる能力を神から約束されていないこと、などを、果たすと誓願してはならない」(同22:7)と語ります。罪を犯したならず者たちが裁かれるのは当然のことですが、他のベニヤミン族に対する裁き・制裁を、主は認めておられず、すべてのベニヤミン族に対する制裁を誓うことは、主が禁じられていることです。

その結果、ベニヤミン族の女は絶えてしまいます(16)。イスラエルの民の行った誓いは、結果として、12部族からベニヤミン族を失うことになることであり、彼らは事後にそのことに気付きます。このことは、12部族をお与えくださった主なる神に対する挑戦です。

事の重大性に気付いたイスラエルの民は、本来ならば、主の御前に悔い改め、主による赦しと解決策を願わなければなりません。しかし、彼らはベニヤミン族が滅びないで済む方法を自分たちで考えます。それが戦いに出なかったギレアドのヤベシュの人々を滅ぼすことでした(9-14)。ベニヤミンを攻めるにあたり、イスラエルの民は、イスラエル全部族から100人につき10人、従って1000人なら100人、10000人いれば1000人を選んで、……「ベニヤミンがイスラエルの中で行ったすべての非道を制裁しよう」と語っていました(20:10)。

ギレアドのヤベシュの人々の行ったことは、すべての民が裁かれることでしょうか？責任は問われることかもしれませんが、これだけの裁きが行われるのは、自ら行った誤った誓いの結果、さらなる罪を犯していることをもの語っています。

さらに続けて、シロの娘に対する罪が繰り返されます(19-23)。

ここで行われていることは、誤った誓いを行った結果、ベニヤミン族の存続の危機の状況が生じ、罪に罪を繰り返すイスラエルの姿です。請願を守ろうとすることは、主に従い正しいことを行っているように見えますが、ここで行われていることは、罪に罪を重ねる行為にすぎません。一人ひとりの生命、思いを考えることができません。一つの誓いを果たすために、多くの人々を物のごとく取り扱っています。

私たちが主なる神を信じる時、主なる神を知らなければなりません。私たちは主なる神の愛により、罪が赦され、神の子とされました。私たちの罪が赦されたように、隣人の罪をも赦され、神の子としてくださいました。そのため主なる神は、隣人をも愛するように求めておられます。それは隣人の罪を赦すこと、和解することであり、裁くことではありません。隣人の苦しみを自分のごとくに受けとめることが求められます。

この御言葉が示された私たちは、主を信じ、主の御言葉に聞こうとしていますが、本当に主が今の時代に求めておられる御言葉に聞こうとしているのか、私たち自身が主の御前に立ち、自らの罪を悔い改め、主の御言葉に聞き従って行くことが求められています。